

月例研究会（2010年5月26日）

生活史研究における課題と展望  
—ノーマン・K. デンジンの  
「解釈的相互作用論」再考

江頭 説子

本報告では、生活史研究における課題（個人的記録である資料の「客観性」、「妥当性」、「普遍性」の問題、分析と解釈への疑問等）について検討をしたうえで、ノーマン・K. デンジンの主張する解釈的相互作用論によるアプローチについての批判的検討をおこなった。

まず、なぜ筆者が解釈的相互作用論によるアプローチに着目するに至ったかについて説明する。筆者はこれまで職場の構造（特に就業形態の異なる労働者で構成される職場）と、そこで働く人びとのキャリア（職業上のキャリアという狭義の意味ではなく、生涯を通しての生き方・働き方の表現としての広義の意味におけるキャリア）との関係をあきらかにするために、シンボリック相互作用論によるアプローチ方法にもとづき実証的研究をおこなってきた。2009年の12月からはフィールドを拡大し、特定の地域に焦点をあて地域構造の変容とその地域に暮らす高齢者の生活との関係をあきらかにするための調査に着手した。まず事前調査として、2010年3月より高齢者の生活史の聴き取り調査（対象者7名）を開始した。そこで語られる経験は、職場の異動やライフステージの変化、必要とされる技能の変化といった一般的な経験で

はなく、家族の離散、産業構造の変動による労働移動、公害経験、罹患といった、その人の人生そのものを変えてしまうような経験であった。このような経験を分析し解釈するためには、シンボリック相互作用論によるアプローチ方法では限界があると筆者は考えた。そこでいくつかの方法論を検討した結果、解釈的相互作用論によるアプローチに可能性があると判断した。

「解釈的相互作用論」（Interpretive Interactionism）とは、直接的な経験の世界の中で起こる個人の私的なトラブルが、このトラブルへの公的な反応へといかに結びつくかを研究する理論的、方法論的なパースペクティブであり、彼らの人生設計に与える意味を根源的に変容し、形成する彼らの人生経験である「エピソードファニー」〔劇的な感知〕に焦点を当てる点に特徴がある（Densin 1989 [1992] : iii）。デンジンが解釈の基準、解釈の状況づけ等について具体的な方法を提示している点、問題を経験する人の視点から解釈的評価を行う必要があると主張する点については評価に値する。しかし、因果関係を分析することや一般化を拒絶する点においては同意することはできない。

本報告は研究ノートの段階である。デンジンは、質的研究の領域では学問分野を超えて世界的に知られた研究者であるが、日本ではその業績が十分に理解されていない。質的調査、生活史研究の方法論をより深めていくために、1990年代以降のデンジンの研究について、今後稿を改めて検討していく。

（えとう・せつこ 法政大学大原社会問題研究所

兼任研究員）